2012.7.4 読売夕刊

エンターテインメント

オンステージ

渡辺 玲子

新鮮味を求めて常に変化

無伴奏バイオリン
ソロ・リサイタル

日本の高校を中退して渡米、ニューヨークのジュリアード音楽院で学び、世界デビューを果たした。それから20年あまり。「自分が求める音が最近、ようやくわかってきたような気がします」。抜群のテクニックとドラマチックな表現に、さらに深みが加わった。

東京では約10年ぶりとなる無伴奏のソロ・リサイタルは、バッハのパルティータ第1、3番、ヒンデミットのソナタ第1番、エルンストの「シューベルトの『魔王』による大奇想曲」など本格的なプログラムだ。ほぼ同じ曲目のCD「SOLO」（フォンテック）も6月に発売された。

今まではソリストとしてオーケストラと共演する機会が多かった。「限られたレパートリーを繰り返し弾くだけでは、音楽と出会う時の新鮮味が薄れる。常に変化を求め続けることが大事です」。2011年には作曲家・新実徳英（とくひで）の無伴奏曲の新作初演に取り組んだ。ゼロから音楽を組み立てて、一つ一つの音の必然性を繰り返し自問自答した。得難い経験だったという。

2年前から1680年製の名器ガルネリ・デルジェスを使っていることも、新たな変化をもたらしている。「以前愛用していたストラディバリウスと比べると、低音ががっちりしていて、響きが暗い。音楽の作り方も変わってきました」と言う。

技術の錬磨に加え、徹底した譜読みで曲全体の構造を把握し、細部のニュアンスを詰めていく。そうした作業を経て、初めて個性が表れると話す。「楽曲分析がより楽しく感じられるようになり、精神的に安定して演奏できるようになった」。一人舞台で開く新境地に注目したい。

19日午後7時、赤坂のサントリーホールブルーローズ。☎0570・55・0017。

朝日新聞（夕刊） 2012.7.2 夕刊 第3種郵便物認可

音楽

ARTS & CULTURE

「無伴奏は自由の象徴」

バイオリン・渡辺玲子が新境地

バイオリンの渡辺玲子が、無伴奏の世界で新境地をひらいている。新譜「SOLO」を発表し、19日には東京・赤坂のサントリーホールで無伴奏作品を集めたリサイタルに挑む。「人生の伴侶」であるバッハには、とりわけ「弾くたびに自分の変化に気付かせられている」という。

剣士を思わせる潔い弓使い。新譜でも、芯のある音で、哲学的なバッハから技巧的なエルンストまで、迷いなく駆け抜けている。

「無伴奏は自由の象徴」と語る。自らのテンポや色彩感に素直でいられるからだ。その無伴奏を軸に試行錯誤を重ねたことで、「若い頃よりも安定したテクニックを得た」という。

「練習すればするほどうまくなる、というのは間違い。『こう弾きたい』という頭の中のイメージを、肉体を使って実現させてくれるのがテクニック。無理のない姿勢で自分をコントロールできる今のほうが自由だし、テクニックも上がったように思う」

音楽現場にとどまらぬ活動も、演奏に新たな色合いを加え続けている。最近では、コンテンポラリーダンスの金森穣率いる「Noism（ノイズム）」と共演。テンポもニュアンスもその都度変わるスリリングな「一期一会」を、ダンサーたちと満喫した。

若い頃、パガニーニ国際コンクールなどで優勝を重ね、注目を浴びたが、「あの頃は、どこかスポーツのような感覚で弾いていた」と振り返る。

20代の頃の米国暮らしで、音楽家は地域社会に根差した存在でなければならない、と思い知る。コンクールで勝っても、米国ではさほど騒がれない。脚光にもブレない軸を培った。

現在、秋田の国際教養大で教鞭をとる。ビバルディの「四季」の大本になった詩を読ませるなど、芸術の世界に潜ってゆくためのヒントを一般の学生たちに教えている。「音楽教育は人間教育。大作曲家が持てる限りの能力と思いを注ぎ込んだ作品だからこそ、精神の支柱をしっかり伝えたい。芸術は単なる娯楽ではないのだ、と」

11月には秋田で、中高生など対象のレクチャーコンサートも開く。「自分が何を感じ、どう思ったか。その根拠を自分のなかで突き詰めてはじめて、進むべき道が見えてくる。音楽と関わることで自分が変わり、人生が広がることがある。その入り口へと、到達できるよう導いてあげたい」

リサイタルは午後7時から。問い合わせは、アマティ（03・3560・3010）へ。

（吉田純子）

昨秋、新実徳英バイオリン作品展で、集中力みなぎる演奏をきかせた渡辺玲子＝竹原伸治氏撮影

テンポや色彩感が自在に